

〈資料紹介〉雑誌『銀鈴』と杉浦非水書簡

山村 桃子

一、文芸誌『銀鈴』

島根県立大学松江キャンパス図書館には、〈山陰『明星』歌人資料〉と名づけられた貴重資料が所蔵されている。

奥原碧雲（一八七三—一九三五）、河野翠漱（一八八四—一九四一）、能海紫星（一八八五—一九一五）という明治大正期に島根県において活躍した地方文人の残した資料であり、約一一七種二七八点に及ぶ。この三名の文人は、いずれも明治期の新詩社による詩歌雑誌『明星』とのかかわりを有し、山陰地方の文芸活動を大きく発展させた存在である。

本資料は、本学の前身である島根県立島根女子短期大学の名誉教授・寺本喜徳氏が奥原家、河野家、能海家に寄贈を許され整備したものである。伝統的に和歌の作歌活動が盛んであった出雲地方において、地方歌人の資料を収集・

保存し、郷土の文学遺産を継承することを目的として本資料の設置を志し、それぞれの遺族から資料提供が行われた。

この年、島根県立女子短期大学に文学科が認められ、文学科の増設は、郷土文化の継承と創造を教育目的の一つとすることによって許された。カリキュラムには「郷土文学概論」（通年四単位）が設けられた。また一九九八年には、「山陰『明星』歌人資料展」が同図書館にて行われ、その資料の多くを公開した。

本資料は寺本氏によって目録が作成され^①、その後、寺本氏^②や学生ら^③によって基礎調査がなされた。しかし、その後には長らく活用されず、本学図書館司書である北井由香氏の資料紹介^④を手がかりとして、令和以後たびたび学外機関からの閲覧・研究利用がなされるようになった。このような状況に鑑みて、本資料を広く周知し、研究の便を図るため、資料の一部をデジタル化し、本学図書館

Webサイトにおいて「山陰〈明星〉歌人資料一覧」としてデジタルアーカイブの公開を行うこととなった⁵⁾。その端緒として、二〇二二年には島根の地方文芸誌『銀鈴』全号が公開された。本稿では、この『銀鈴』にかかわる本資料の一部について紹介していきたい。なお『銀鈴』各号の概要については山崎克彦氏『石見人物記』⁶⁾、全体の概要については明石利代氏『明星』の地方歌人考⁷⁾を参照されたい。

雑誌『銀鈴』は、『明星』石見支部を担った河野翠激が中心となって刊行した明治期の地方文芸誌である。明治三七（一九〇四）年に第一号が創刊され、同四二（一九〇九）年に三六号をもって終刊した。内容は、新派短歌（短詩）を中心として、俳句、長詩、漢詩、美文、小説、評論、雑文、紀行、書簡など多様なジャンルの作品が発表されている。『銀鈴』発行の主目的については、明石氏が次のように述べる。

「文庫」「新声」への投書から始まる翠激が新しい文学創造の運動に参加する意図を有っていたのは明らかであり、それが「明星」中心になってきて殊に短歌に重点をおくようになったが、地元での動きとも結びついて新涼会結成と「銀鈴」発刊とになっていったその運動の最も端的な目標は、会員達を「明星」で活躍させ

ることにあつたとみてよいのではないのか⁸⁾。

明治三三年に創刊された『明星』により、和歌の革新運動が全国に広まる中、島根県においても明治三五年頃に短歌運動の盛り上がりがあり、多くの結社が存在したという⁹⁾。『銀鈴』はその『明星』歌人の育成を目的とした雑誌と考えられている。

『銀鈴』を創刊した河野翠激（本名岩雄）は、島根県邑智郡田所村（現邑南町下田所）に生まれる。島根県と広島県の県境近い地域である。明治三一（一八九九）年、十六歳の時に早稲田大学聴講生となり、その間、文芸誌や新聞での作品の発表を積極的に行い、与謝野鉄幹に師事して、短歌・俳句・小説などを創作した。『明星』には翠激の作品も掲載される。

翠激は田所村役場に務めながらも、河合咀華を中心に、青戸白虹、岩崎醉芳らと「紫虹社」を結成し、『明星』石見支部を開設、三六年に月森神来、森脇桃村、菅原紅雨らと「新涼会」を結成する。同年には詩集『第一白檀弓』を刊行、三七年には『銀鈴』を創刊した。

『銀鈴』第一号【図①】はわずか四頁の簡素な冊子であり、二〇名の地方歌人による計四五首の短歌作品のみが掲載される。編集兼発行人は翠激で、発行所は「新涼会」、印刷は邑智郡川本村（現川本町）である¹⁰⁾。

第二号は八頁と増加し、評論、短詩（短歌）、俳句、小

説、英文、評釈、雑文と多数のジャンルの作品が掲載される。短詩は新涼会詠草、石見、浜田、伯耆、出雲に加え神戸からも寄稿がある。

二号の発行所は「銀鈴社」と改められ、「新涼会」は銀鈴社内位置づけられている。「會友の短歌は「銀鈴」に掲載し随時単行詩集を發行し頒布す」とあり、第四号には同誌と「松陽新報」に限り新涼会の詠草を発表するとある。

第三号【図②】は『銀鈴』にとって記念すべき号である。頁数は全十六頁と大幅に増え、表紙は杉浦非水（当時は本名の朝武で活動したが、以降非水と呼ぶ）による画で飾られた（次節）。新涼会詠草は松江支部、浜田支部とあり、二葉会の俳句が掲載される。「編集餘言」には、松江・浜田・米子に新涼会の支部が置かれたことが記され、「なほ各地に支部設置を希望致候」とその拡大を図り、第四号では出雲に第四支部、第六号では大東支部が新たに設置されている。

第三号以降、杉浦非水の表紙に彩られた『銀鈴』【図③】④⑤⑥はその勢いを増し、精力的に刊行される。また他誌をも吸収し、第十号（明治三十九年二月）で碧雲会俳誌『草笛』（松江）¹¹、第二一号（明治四〇年四月）で白鳥会と合同したことが記される。「我が銀鈴社が能く已に三年の苦節を全うせるは、社友及び読者諸君の明知せらるる所なるべきを信ず」として、継続の苦勞が示されるものの、「我社は、今や諸君が我社の地方雜誌界に於ける勢力を檢

し給ふべき、好箇の時機に達したることを、自ら告ぐるの光榮をよるこぶ」（第二一号）と、安定した刊行の困難な地方文芸誌界において、他誌を吸収しながら成長・発展した自負が示された。

なお、『草笛』との合同にあたり諸条件を確認した、奈倉梧月・祝羽風筆の翠激宛書状【図⑦】（明治三十九年一月一日付）も、本資料群に収蔵される。

また、新たな読者獲得の試みと読者育成を目的として、懸賞俳句（第一三号より）、和歌初學者のための無料添削（第一九号）が開始され、短歌の選者として東京の平野萬里（一八八五—一九四七）が迎えられた。平野は『明星』等に作品を多数発表する「青年詩人」であった。

『銀鈴』編集局は、明記されている限りでは左記の全七名がみとめられ、翠激以外は、他県への異動等の理由により、常に入れ替わりをみせる。

河野翠激（全号）

佐々木朝風（第三号〜第十号）

大屋桂水（第三号〜第一四号）

菅原紅雨（第十号〜第三二号）

千代延松灣／春圃（第八号〜？）

朝日山錦水（第二三号）

河野素陽（第二八号）

中でも、新涼会結成メンバーである菅原紅雨（本名正男）は、佐々木朝風と入れ替わる形で第十号から編輯担当となり、以後三年半にわたり翠激を支えた。

第二九号（明治四一年二月）には編集局の業務分担当が示され、「社友加盟、購読申し込み、広告に関する事件」については銀鈴社事業部（下田所・河野翠激）、「社友および一般読者の寄稿、新刊雑誌類の寄贈等編輯一切に関する事件」については銀鈴社編輯部（下亀谷・菅原紅雨）に寄せるよう記される。この頃には誌面の実質的な編輯は紅雨が担うようになっていたことが窺える。

それに先立つ二五号【**図⑧**】（明治四〇年九月）では判型を変更しており、その理由を次のように記す。

元来、雑誌の編輯には、表面に現はれない多くの苦心と努力とを要するものだ。投書を夫々區分したり、清記したり、社告も書く、新刊紹介も書く、字詰行数の計算、活字の植え方、すつかり一部の原稿が出来上がった時、活版所へ送る。それが印刷して回るまでに、封筒などの準備を整へて置く。斯ういふ手数を、毎月繰返さねばならぬ、少しの油断があつたら、最う直ぐ、遅刊だ、休刊だ。

以上は編輯の側に就いてであるが、それが營業部の方へ行くと、財政上の迫害と戦はねばならぬ。帳簿の整理や、広告の交渉、印刷所との談判、いや仲々の騒

ぎでない。

それも遊んでいる人々の、慰みになら善からうが、相應に多忙な職業を有してゐる我等には、實に堪へ難いことだ。

と云ふ譯から、従来の紙面を一層緊縮して、可成我等の手数を省きたいというふことにした。畢竟、眞に我等と志を同じうする人々の、堅き結合を以て、文藝を樂しようとするのである。我等は、社友諸君の温情熱意に信頼して、逞まで奮闘を續けたいと思ふ。

（第二五号「社告」）

翠激は明治四一年九月に二五歳で田所村助役に就任しており、多忙の時期にさしかかつていた。本号より判型は袖珍正方形版の一段組となり、表紙絵・目次・広告もなくなると刊行の続行を望んでいる。このような「紙面の緊縮」は、拡大傾向にあつた『銀鈴』の大きな転機といえる。同時に「社内整理」を行い、「少數の人々のみを以て組織結成することにした」（三五号）ことが後に明かされる。

長らく編輯に尽力した紅雨は三三三号（明治四一年七月）に「転勤のため本村を去れり」と異動のため、その任を離れた。編集は再び翠激が全てを担うこととなり、その半年後の明治四二年二月をもって終刊する。翠激の繁忙もあるが、同時期である明治四一年一月の『明星』廢刊の影響

は大きかつただろう。

終刊号において、紅雨は「終始離れざる財政上の迫害と、兄が身の愈々益々多忙を加ふるとは、到底これを持続する能はず、憾みを呑んで廃刊する運命に陥れり。悲しからずとせんや」と翠激の労を慮った。

終刊について、翠激自身は次のように述べる。

五年の歳月は、雑誌の壽命より云へば決して短くない。その間幾多の苦境を経つ、も無難に今日まで漕ぎ附け得た努力の跡を振り返ると、豈に多少の感慨なからんやだ。過去奮闘の歴史を想ひ出す毎に、其處に直に我等は我等の愉悦と誇りと影が浮ぶのを認める。

(第三三号「懷舊五年」)

本誌銀鈴は本號を以て終刊と致候。小生微力の經營が遂に三十六號に達し候事思へば多少の感なきにあらず候。

(終刊号「卷末語」)

終刊号では、翠激の呼びかけにより、社友の懷旧談や小品の寄稿があり、誌面は最後の賑わいをみせる。『明星』と共に『銀鈴』廃刊を皆惜しんだ。

岡山の血汐会を主宰する入澤涼月は次のように評した。

興廃常なき現今の地方文壇は絶えず不忠實なる夥多の

雑誌を迎へて居る、十號とその生命を保たぬ地方雜誌は河野君の薄ぺらな銀鈴に如何なる面目があらうか、河野君は地方文學の鼓吹に就いては餘程盡力された人である、(終刊号 入澤涼月「銀鈴と河野君」)

涼月の名は夙に第一号より見え、卷末広告に血汐会『白虹』も掲載されていた。一方『白虹』においても『銀鈴』の広告が掲載され、両誌は相互に關係を深めていた。明石利代氏は、『白虹』においては河野翠激が先輩として重視され、その協力を期待したとされる¹²⁾。

『白虹』は明治三六年三月に創刊された『血汐』を前身として明治三七年に刊行され、明治四二年二月の二八号を最終号とした。その創刊と終刊は『銀鈴』と同時期であり、両誌の發展と終焉は軌を一にしていたといえる。こうした岡山の文學運動との関連についても注目されるところである。

涼月のほか、『銀鈴』において重んじられた文人として、『明星』で活躍した青戸白虹、川上櫻翠、平野萬里、多田東岳、藏田のぶ子、奥原碧雲などが挙げられる。また筆名「天涯の孤客」でのち大阪市立大学初代学長となる井川(恒藤)恭、新涼会浜田支部を担い、タゴール詩などを翻訳した詩人・増野翹白(三良)らの作品が載ることも見逃せない。既に奥野久美子氏によつて、(大阪市立大学恒藤恭旧蔵資料)と併せて本資料を活用し、井川恭の松江時代の短

歌についての研究がすすめられている⁽¹³⁾。

二、杉浦非水 表紙絵と書簡

『銀鈴』の表紙を飾るのは、グラフィックデザイナーの先駆者的存在といわれる杉浦非水(本名朝武)(一八七六一—一九六五)である。三越呉服店の図案を担当し、多摩帝国美術学校(現多摩美術大学)の校長と図案科の教授であつたことで有名である。

非水は、明治三十七年四月に旧制島根県立第二中学校に図画教員として赴任し、明治三十八年十一月に上京し中央新聞社に入社するまで、島根県浜田市に居住した。本校は邑智郡美郷町出身の画家・中原芳煙(一八七五—一九一五)の母校であつた。東京美術学校(現東京藝術大学)卒業後、芳煙は母校に教師として赴任するものの、二ヶ月で師の川端玉章に呼び戻される。同門下の非水は、芳煙の後任として浜田に赴任した。

非水は、正岡子規や高浜虚子などで有名な松山市の生まれであり、島根での教員時代には子規派の俳句に熱中し、その頃に使用していた俳号が「翡翠郎」であつたという⁽¹⁴⁾。雅号「非水」はこの俳号に由来し、中央新聞社からこの号を使用し始めた(島根時代は「杉浦朝武」の本名で活動)。

俳句に関心の深い非水は、与謝野晶子『みだれ髪』(明治三四—一九〇一年)に感銘を受け、同年に中澤弘光と共に

に「みだれ髪歌かるた」を製作した。非水の存在を知つていた河野翠漱は、非水の浜田赴任を知り、『銀鈴』表紙絵を依頼したのだろう。第三号から第二三号(うち第一九号—二二号を除く)においてその表紙絵がみられる。

本號表紙繪は昨年一月の雜誌『明星』『みだれ髪歌かるた』畫き給ひし一人の君に候、本社翠漱の懇囑を容れて、特に寄せ給ひしは同人等の感謝する處に候。

(第三号「編輯餘言」)

当初は日本画家を志し川端玉章に師事していた非水であつたが、黒田清輝との出逢いにより、アール・ヌーヴォーに魅了され、図案家の道を志すようになる。ミュシャの絵などを熱心に模写したとされ、その画風は『銀鈴』表紙絵にも顕著にみとめられる。

非水が担当した『銀鈴』表紙絵にはすべて月桂樹などの冠をした女神が描かれ、その手にはペン・鈴・竖琴・蝶などが持たれている。中でも竖琴はほぼ必ず描かれ、女神はギリシャ・ローマ神話における文芸を司る九人の女神たち・ムーサ(Musa/Muse)の一人、エラトール(Erato)であろうか。竖琴と共に描かれるエラトールは独唱歌を司る女神であり、短歌を中心とする『銀鈴』のモチーフに相應しい⁽¹⁵⁾。

先立つ第二号にはそれを祝福すべく、山本明星(大東支

部主宰)が次のような短歌を贈り、翠激を文芸の担い手として「ミューズの神の使い」と称えた。

詩にたかきミューズの神の使いなる君がみ袖に掩はれば足る(翠激の君に) 山本明星(出雲)

(第二号「微響」)

『明星』とのかかわりを持ち、画家として駆け出しであった非水の島根への到来は、『銀鈴』にとって幸運な出来事だったといえる。『明星』を模倣し『銀鈴』を装うことで、翠激は地元歌人らの意欲をより高めようとしたのである。

『銀鈴』の文芸誌としての意気込みは、この表紙絵にも強く託されており、第六号を「夏期號として聊体裁を一新」することを名言した第五号には次のようにある。

諸家の寄稿、會友の作等滿載し、且同人が詩に對する態度を表明すべく、其他表紙繪を改め、挿繪を設くるに就ては、畫伯杉浦朝武氏の快諾を得たるを以て、亦諸君の目を樂ましむるものあるべしと窃かに自信致し居候。

(第五号「編集餘言」)

益々の投稿を期待し、詩に対する情熱を表明しようと、非水に新たな表紙絵を依頼していることがわかる。「読者の目を樂ましむる」、「燦然目を奪ふ」(第九号)ため、記

念号や新年号の折に、早くて三号、長くて六号おきに表紙を刷新しており、全部で五種類の表紙絵がみられる。

創刊二年目となる第六号(明治三八年六月)は、多数の社友の寄稿から成る充実した号であり、非水の作品等も、表紙絵【[図③](#)】、欄画【[図⑨](#)】、消息、卷末画【[図⑩](#)】と多数掲載される。消息では、日常と自身の寄せた絵について記される。

當時、綠蔭風涼しき節と相成、時々閑を偷んで鮮やかなるサツプクリン風光に浴し居申し候。たゞ彩筆を弄するといふ計りにて、あまり面白きものも出来申さず、汗顔の至りに存じ候。(杉浦朝武)

(第六号「松葉牡丹(消息)」)

卷末に「夕陽」と題された多色刷の絵【[図⑩](#)】が綴じ込まれ、これに関わる書簡、杉浦非水から河野翠激に充てた手紙【[図⑬](#)】が本資料に残されている【[図⑬](#)】。

書簡の日付は二月四日とあり、非水が旧制島根県第二中学校在任中の明治三八(一九〇五)年二月四日と考えられる。内容は、『銀鈴』四号(明治三八年二月)を拝受したと、『学の友』の表紙絵の依頼について承知したこと、四月発行の『銀鈴』に挿画を寄贈したいという旨等が記される。この挿画が、第六号の「夕陽」だろう。謄写版であるため精巧なものではないが、発行部数を教えてほしいと

いう内容が記され、非水の手によって印刷されたものが『銀鈴』の巻末附録となつたと考えられる。

この「夕陽」は、非水の島根時代の画帖にある「都野津」（島根県江津市）と同様の構図であり、それをもとに版画としたと考えられる。この画帖は、川西由里氏によると次のような行程で描かれた。

非水は11月3日に浜田から海岸沿いを東に約20キロ、江津まで写生をしながら歩き（当時は鉄道がなかった）、少なくとも2泊したことが分かる。旅館での写生に学生服姿の人物が多数いるので、学生を引率しての小旅行だったのだろう。教員生活を楽しんでいた様子がかがえる¹⁷。

すなわち「夕陽」は、明治三七（一九〇四）年十一月に浜田から江津への写生の旅の中で描かれた作品であつた。左下に「スギウラ 1005」のサインがみられ、版画の制作は写生の翌年であつたことがわかる。

さて、書簡には、「先日御紹介の学の友表紙承知仕候。来る十五日迄に制作仕候」とあり、翠激は非水に『学の友』という別の雑誌の表紙についても依頼をしていたことわかる。

『学の友』については資料が殆どなく、手元の第六十号（明治三九年十一月）を見るのみであるが、學友雜誌社

（島根県飯石郡赤名村）発行¹⁸、編集人は大谷俊輔とある。

『銀鈴』三号に『学の友』の広告が掲載されており、「専ら小學兒童の好同伴となり又家庭少年の良師友となるべき學術雜誌であつて其の記事も教育家の寄稿數篇の外は皆大方讀者の投書であります」と、小學兒童向けの雑誌であつたことがわかる。読者層は広く、石見や出雲のみならず、美作、備後、播磨、紀伊、三河、尾張、下総、常陸、越後、羽前、肥後など、中国・関東・北陸・九州地方にまで及ぶ。本誌は『銀鈴』と同じ赤名活版所にて印刷され、翠激も新派の俳句の選者をつとめている。その他、選者として銀鈴社友が多くみとめられ、佐々木朝風が小品文、岩崎醉芳が新派和歌、奥原碧雲が新体詩の選者として載り、『銀鈴』と『学の友』の主な担い手は重なりも多かったと考えられる。今後『学の友』の新たな号が発見されることがあれば、非水の新しい資料となることだろう。

また、明治三八年八月には、銀鈴社より翠激の『短歌零話』¹⁹が出版され、この挿絵も非水が担当している。ハート背にキューピッドが矢をつがえる構図は、与謝野晶子『みだれ髪』の表紙及び挿絵（藤島武二絵）に影響を受けたものと考えられる。

非水は明治三八年十一月、東京の中央新聞社に入社するが、島根を離れても両者の繋がりは途絶えていなかったようである。第十号では社友動静として次のようにある。

杉浦朝武氏は、目下在京、某新聞社に在りて彩筆を揮はれつゝあり。
 (『銀鈴』第十号「社友動靜」)

非水の表紙絵が見られなくなるのは第一九号(明治四〇年一月)の新年号からであり、「文学雑誌 銀鈴」と題したシンプルな表紙に代わり、同表紙が二二号まで続く。二三・二四号は再び非水の画となるものの、第二五号の判型変更に伴ってか(前節)、「銀鈴」とのみ印刷された、第一号にも似た簡素な表紙に回帰する。

翠激が業務多忙となったのと同時に、非水もまた明治四一年に三越呉服店の凶案を担当し人気を博していた。この頃から徐々に両者の関係がみとめられるのは、非水の島根従って翠激と非水の関係がみとめられるのは、非水の島根時代から中央新聞社時代の四年間といえよう。

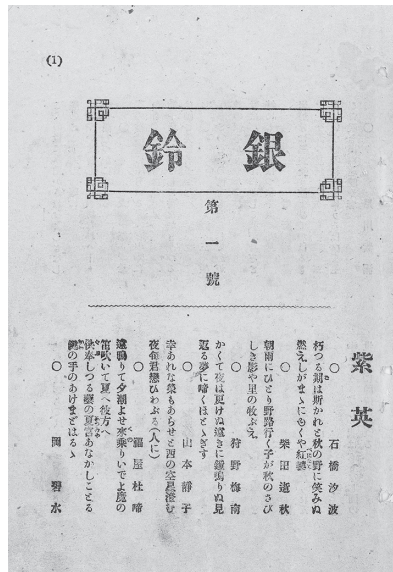
さて、『銀鈴』八号(明治三八年十月)には、非水の俳句が掲載される。千江選で、「秋の日」と題される中の一句であり、俳号「翡翠郎」が用いられる⁽²⁰⁾。

葉を渉る蟬螂の斧や肩の上 翡翠郎

蟬螂の様子を描いた写生的な句である。『銀鈴』に翡翠郎名義の作品はこの箇所のみであるが、非水の俳句作品として貴重なものであるといえるだろう。



【図②】『銀鈴』第三号表紙(杉浦朝武)



【図①】『銀鈴』第一号表紙



【図④】『銀鈴』第九号表紙
(杉浦朝武)



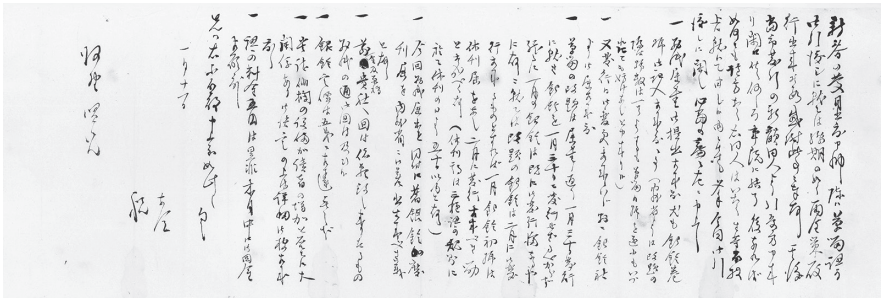
【図③】『銀鈴』第六号表紙
(杉浦朝武)



【図⑥】『銀鈴』第二三号表紙
(杉浦朝武)



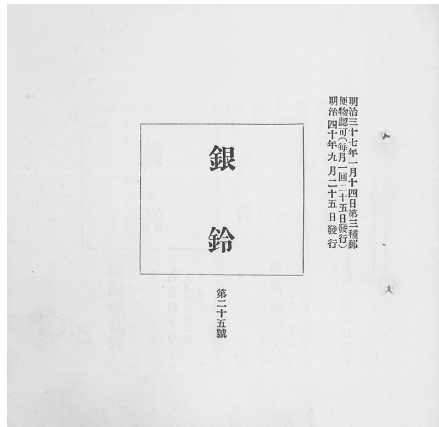
【図⑤】『銀鈴』第一号表紙
(杉浦朝武)



【図⑦】河野翠漱宛書状（奈倉梧月・祝羽風）



【図⑨】「銀鈴」第六号欄画（杉浦朝武）



【図⑧】「銀鈴」第二号表紙



【図10】『銀鈴』第六号巻末画（杉浦朝武）



【図11】河野岩雄宛書状（杉浦朝武）

- 注1 寺本喜徳「山陰『明星』歌人資料目録」一九九八年十一月 島根県立島根女子短期大学附属図書館
- 注2 寺本喜徳「山陰文芸襍記」「山陰『明星』歌人たち」島根県島根女子短期大学国語国文学会 一九九九年、『島根県近代文芸史稿―資料と考察―』山陰文藝協会 二〇一四年
- 注3 福田喜代美「河野翠激編『銀鈴』総目次」「島根国語国文」九号 一九九八年二月、「河野翠激編『銀鈴』作者名索引」「島根国語国文」第十号 一九九九年二月、堀田美穂「河野翠激の生涯と文学」「島根国語国文」第八号 一九九七年十二月など
- 注4 北井由香「ご存じですか?この山陰歌人」「のんびり雲」第三号 二〇〇九年十月
- 注5 島根県立大学松江キャンパス図書館「山陰明星歌人資料」<https://matsuec.u-shimane.ac.jp/campus/library/sanin.html>
- 注6 山崎克彦「石見人物記」「明星派の歌人 河野翠激」一九八九年
- 注7 明石利代『「明星」の地方歌人考』『河野翠激』一九七九年 笠間書院
- 注8 明石利代(前掲書)
- 注9 明石利代「奥原碧雲」(前掲書)
- 注10 第二号は松江、第三号以降は基本的に赤名活版所で印刷された。
- 注11 『草笛』は明治三六年に創刊された俳句誌。正岡子規に師事した奈倉梧月らにより、三〇年に碧雲会が結成された。
- 注12 明石利代「岡山の文芸誌『白虹』を中心とする文学運動」「女子大文学 国文篇」(大阪府立大学)二二三号 一九七二年
- 注13 奥野久美子「大阪市立大学恒藤恭旧蔵資料と明治期島根県明星派歌人とのかわりについて」西田正宏・奥野久美子編『上方・大阪都市文化の研究拠点形成…大学アーカイブの整備と発信』大阪市立大学都市研究プラザ 二〇二二年三月
- 注14 長井健「雅号「非水」とサインの変遷」『杉浦非水 時代をひらくデザイン』毎日新聞社 二〇二一年
- 注15 古澤夕起子氏より九条武子歌集『金鈴』の装丁を杉浦非水が行っているとのご教示をいただいた。表紙絵の孔雀は非水が好んで描いたモチーフであり、『銀鈴』九号の女神の頭にも孔雀の羽が描かれている。
- 注16 読解にあたっては寺本喜徳先生にご協力を賜った。
- 注17 川西由里「杉浦非水の島根時代」『杉浦非水 時代をひらくデザイン』毎日新聞社 二〇二一年
- 注18 但し、『銀鈴』第八号「寄贈新刊」には、「学之

友」(一〇)岡山 學之友雜誌社」とあり、岡山での発行となっている。

注19 河野翠漱『短歌零話』銀鈴社 一九〇五年 国会図書館デジタルコレクション

注20 同箇所において、「翠子」という人物の次の句が掲載され、非水の妻・杉浦翠子であるとも考えられる。

放屁虫芋掘る爺の足を追ふ 翠子

附記

本稿は、令和三年度島根県立大学学長裁量経費(若手支援枠)研究課題「山陰〈明星〉歌人資料デジタルアーカイブ作成と公開及びその研究」、令和四年度科学研究費基盤研究(C)研究課題「近代島根歌壇の研究―恒藤恭の短歌関連資料と山陰『明星』歌人資料を活用して―」(研究代表者 奥野久美子、研究分担者 山村桃子)の研究成果の一部である。

(島根県立大学人間文化学部 准教授)